

留萌いま・むかし 第78話

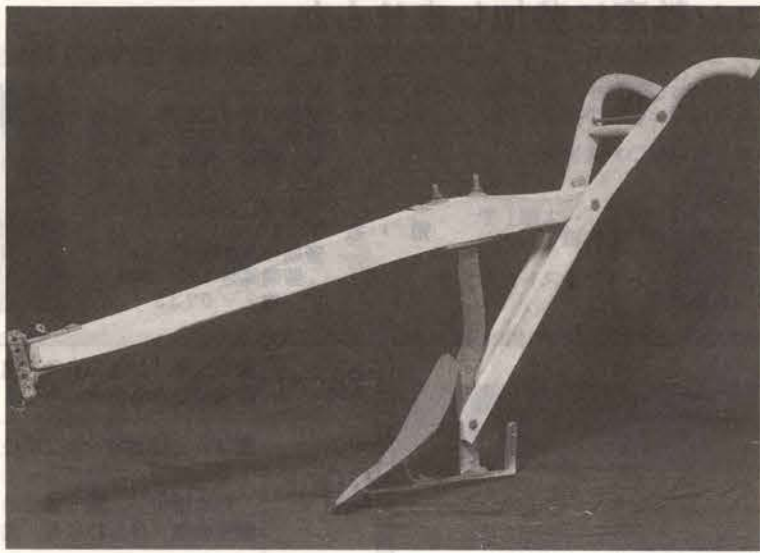
留萌の農業 1

(2) 候補者別得票数(無投票)

開拓地に入植した人たちが初めてする作業は、自分たちのすむ場所を確保する九尺×二間(約十坪)の小屋がけであった。その後は入植地に鬱蒼と茂っている木々の伐採と抜根作業である。畑を作るために背丈以上に生い茂った笹を刈り、冬の間にも木を切り倒し、夏の間はそれを集めて焼くのである。開拓地のあちらこちらから煙が上がらぬ独特の風情があった。しかし、生い茂る大木は簡単には切り倒せるものではない。直径が二メートルもある木などは倒すだけでも二三日はかかった。そのあとは一坪に二、三個はある木の根株を掘り起こしていくという大変な作業の連続であった。能率はあがらず、元気の良い若者でも

福士広志
海のふるさと館学芸係長

を続けていったのである。こうして開けた開墾地に最初に播く作物は小豆や蕎麦の類である。留萌川の河畔地はそれだけでなく肥沃



開拓に活躍したプラウ

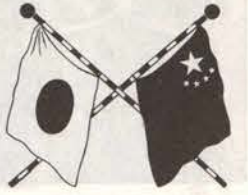
開拓地に入植してから十年後の作物を見てみよう。明治四十三年には作付け面積の多い順に小豆七千八百反(約七十七・三ha)、粟

種六千五百反(約六十四・五ha)、大豆四千五百二十反(約四十四・八ha)、裸麦四千五百反(約四十四・六ha)、馬鈴薯一千八百五十反(約十八・三ha)、燕麥一千五百五十反(約十五・四ha)、とうもろこし一千五百反(約十四・九ha)、黍一千二百反(約十一・九ha)、小麦一千二百反(約十一・九ha)、大麦七五八反(約七・五ha)、大根四百反(約四ha)、牧草四百反(約四ha)、人参百七十反(約一・七ha)、蕎麦百二十反(約二・二ha)、ゴボウ二十反(約二・二ha)となっている。この当時、稲作も試みられているが作付け面積は明治四十二年で三十九町八反(約四ha)と、まだ本格的な水田耕作は行われていなかった。

一日に一畝から二畝ぐらいしか開墾できなかったという。それでも一日一日確実に広がっていく畑の面積に勇気付けられ毎日毎日作業

な土地であった。大豆等はあまりに大きくなりすぎて実がつかなかった。そのあとに麦、いなこ、馬鈴薯で最後に菜種を播いた。

大豆等はあまりに大きくなりすぎて実がつかなかった。そのあとに麦、いなこ、馬鈴薯で最後に菜種を播いた。



中国営口港務局経済代表団来留

両港の発展とさらなる友好を誓う



▲代表団が市役所に到着、大勢の市職員が出迎えました。

営口市の位置図



平成2年4月に留萌港と友好港湾都市の締結をした中華人民共和国遼寧省営口市から、港務局の代表団男女合わせて11名が去る5月17日から21日までの5日間留萌市を訪れました。代表団は、市民との交流をはじめ経済関係者との懇談会、市内の企業、教育、文化施設等を見学し、より一層の友好を誓い、帰国の途につかれました。



▲潮静小学校生徒の熱い歓迎に一行も大喜び



▲李団長を迎える市長



▶茶道・華道を通して日本の文化に触れ和やかな雰囲気になりました。



◀市内を一望できる千望台で記念撮影



◀汗をにじませ、得意な卓球で交流試合